本興寺障壁画群仙図の菊慈童と個人蔵「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸について

後藤妙扇

大本山本興寺の方丈は大坂の町絵師たちによって各間が荘厳されている。[1] 六間中、室中前室の鶴之間には「群仙図」（襖一〇面）と「群鶴図」（襖四面）が襖に描かれており群仙図中、西側には南側から順に劉女・蔡女仙・菊慈童・董奉。北側に孫登・呂恭・黄仁覧が描かれているとされる。[2]

先日、ネットオークションに高平春卜（以下、春卜）の画と思われる掛け軸が出品された。真贋については鑑定のない状態であった。筆者が落札することは叶わなかったが、現物を拝見する機会を得た。春卜は本興寺障壁画「群鶴図」に落款があり、「群仙図」には落款等ないが筆致の癖などから春卜作とされてきた。春卜の本興寺障壁画群仙図以外で菊慈童を題材とした作品が現状では伝わっていない為、今回発見した「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸（図1）の作品記録を行い、同題材である本興寺障壁画群仙図の菊慈童との比較を行う。

図1　「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸全体

一、菊慈童とは

菊慈童は、『大辞典』に、㈠支那、三代の周の穆王の寵童の名。王の枕を超えた罪により南陽郡酈県（れきけん）に流されたが、その地で菊の露を飲んで不老不死の身となる。㈡能楽の曲名。㈠切能祝言曲。魏文帝の臣下が酈県山で菊慈童に逢ふ筋。観世流・梅若流。寶生流・金春流・喜多流・金剛流は枕慈童。㈡別名、彭祖仙人。菊慈童の仙人が魏文帝に仕へ、文帝が仙人の棲處に行幸する筋。クセは蘭曲。廃曲。㈢所作事・長唄。乱菊慈童の別名。㈣長唄。新古演劇十種之内の枕慈童の別称。[3]

枕慈童の項目にも、㈠謡曲の曲名。別名、菊慈童・酈県（れきけん）山・てっけん山。別称、枕。周の穆王の枕を跨いだ罪で山に捨てられ、枕の妙文を菊の葉に写しその露を吸って仙人となった慈童なる者に、薬の水を捜しに来た魏の文帝の臣下が逢う筋。廃曲。㈡能楽の曲名。㈠祝言曲。別名、菊慈童。（中略）㈡四番目曲。漢の皇帝の臣下が、薬の水を捜して慈童に逢ふと、崑崙山の仙女の仙薬により慰められ且つ薬の水を捧げられる筋。観世流。[4]

本興寺障壁画群仙図は先述の通り、劉女・蔡女仙・菊慈童・董奉・孫登・呂恭・黄仁覧と中国の時代も場所も異なる仙人が描かれており、それぞれに繋がりはない。菊慈童以外の六人の仙人は『神仙伝』[5]など中国に編まれた仙伝が存在する。しかし菊慈童は中国の仙人・彭祖（ほうそ）に日本の菊に関わる逸話が混ざって生まれた、和製の中国仙人である。[6]

三谷茉沙夫氏の『不老不死伝説』[7]には、彭祖について、

仙人のなかで、代表的存在のようにいわれているのが彭祖である。『列仙伝』によると、彭祖は殷の大夫で、夏の時代から殷の時代の末まで、八百余歳を生きたという。常に肉桂、霊芝を食し、導引行気の術に通じていた。歴陽には彭祖の仙室と称するものがあるが、昔ここで風を呼び雨乞いをすると、そのつど、霊験が現れたという。「前世に禱りて風雨を請うに、すなわち応ぜざる莫し」（『列仙伝』）。祠の左右には常に二頭の虎が控えていて、祈りが終わると、いつも地面には虎の足跡がついていた。彭祖は、後に仙人となって天に昇った

と記されている。

葛洪の『神仙伝』はさらに詳しい。

彭祖は殷の末期には七百六十七歳になっていたが、全く老衰していなかった。若い頃から安静を好み、世事に関わらず、名声を気にせず、外見を飾らず、ひたすら生を養うことに努めた。（中略）采女は、この養生法を王のもとに持ち帰った。王がさっそく養生法を実行したところ、大いに効果があった。王は、この養生法を門外不出の秘法にしたいと考え、もしこの法を伝えるものがあれば、即刻死刑にすると厳命した。そればかりではない。王は、長寿法の源である彭祖まで殺して、伝承を絶とうとしたのである。このことを

知った彭祖は、いち早く国を去って姿を隠した。後に彭祖を砂漠の西方で見たというものがあったが、それは国を逃れて七十年も経ってからのことである。

以上は中国における彭祖についての逸話で、日本で形成された菊慈童の説話についても取り上げたい。『太平記』[8]「竜馬献上」の穆王と菊慈童の説話には以下のようなことが書かれている。[9]

後醍醐天皇のもとに素晴らしい駿馬が献上されたが、駿馬の扱いに関して意見が割れた。洞院の藤原公賢は龍馬の出現を吉瑞とし、万里小路藤房は凶兆と捉えたのである。公賢は、周の穆王が八頭の駿馬を御することによって、釈迦の霊鷲山における法華経の説法に同席することが出来、治国の法を授かった説話を挙げ、駿馬を吉とみた。一方、藤房は穆王が八駿にかまけて政を疎かにした理由から凶とした。

このように、後醍醐天皇のもとに駿馬が献上されたことを吉兆と捉えた公賢が、その理由を説明する際、次のような菊慈童の説話を紹介している。

釈迦の霊鷲山における法華経の説法に同席した穆王は、震旦国に帰って後、釈迦から授かった八句の偈を人に知らせることはなかった。しかしある日、常に傍に置いて寵愛していた慈童が誤って穆王の枕を跨いでしまった。臣下が慈童を遠流の刑に処すことを決めたため、穆王はお守りとして、釈迦から賜った八句中、法華経観世音菩薩普門品第二十五の二句を枕に書き与えひっそりと手渡した。その二句は普門品の「具一切功徳　慈眼視衆生　福聚海無量　是故應頂禮」の文句であったという。

流罪地の深山幽谷で慈童は、毎朝にこの二句を唱え、万が一にも忘れてしまうことのないよう、傍にあった菊の葉にこの句を書き付けた。句を書きつけた葉に宿った露が僅かずつ谷の水に滴り落ちたことで、谷の水は全て第一級の霊薬となり、下流の村々ではあらゆる病が癒されたという。喉が渇いた慈童がこの水を飲

むと大変美味であったが、それだけではなく、天人や鬼人が慈童に奉仕するようになった。そうしているうちに慈童は羽が生えた仙人となり、八百余年後も少年の容貌のままだった。

文帝（魏の初代皇帝　曹丕。一八七～二二六）の時に、慈童は彭祖と名を変えてこの長寿の術を文帝に授けた。文帝は菊花の盃を受け継いで、万年の長寿を祝った。現在の重陽の節句がこれにあたる。以後踐祚の際は、必ずこの経文を心に据え置くという。普門品が当途王経と言われる所以である。この八句の偈は三国を伝来し、治国と除災与楽の重要な指針となった。

公賢は、これらの逸話を紹介し、すべては穆王が天馬を授かったことに端を発するものであることから、今回龍馬が来たということは、仏法の発展と国家の繁栄、また皇位が長く続くことへの吉瑞と考えられると結んでいる。

二、個人蔵「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸

今回拝見させて頂いた掛け軸は本紙89×28㎝、総丈159×30㎝の大きさだった。和紙に賛・画共に墨一色でかかれている（図2）。賛とは補佐の義、与えられた一の対象に加える一種の文学的注釈である。[10] 画は油煙墨[11]を使い、立ち姿の人物が描かれており、その姿は右手に花を二つ付けた菊を一本持ち左前方を見据え、片足を衣の裾から僅かに覗かせている。賛は一井鳳梧、画は法橋春卜筆と書かれていた。

賛を書いた一井鳳梧（一六一六～一七三一）は、

徳川中期の儒者。出雲松江の人。名は光宣、字は桐助、鳳梧はその号。京都の鴻儒某家に養育せられ長じて林

図2　「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸本紙部分

羅山に学び諸侯に歴仕す。のち辞して浪華伏見両替町に住し、従学する者千二百人、浪華に文学を講ずる者のはじめである。享保十六年七月二十五日没、年百十六。高津寺町圓妙寺に葬る。著述を好まず、門人平生聞く所を編集し之を『鳳梧論説』といふ。（『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』第五巻　平凡社、一九三八年初版発行、一九九〇年復刻版第五刷参考、二五二頁）

画を担当した法橋春卜とは、大岡春卜（本興寺障壁画落款には高平姓。その後藤原、大岡姓を名乗った）[12]（一六八〇―一七六三）のことで、『日本人名大事典』には、

大岡春朴―徳川中期の畫家。延寶八年生る。大阪の人。一に春卜。名は愛董。雀叱、一翁、翠松、雪靜齋、朴

翁の別號がある。少壯畫を好み、師事することなくして、よく狩野派の畫を描き名声があった。京都大覚寺門跡の眷顧を蒙り、法橋から式部卿法眼に叙せられ、同寺の坊官に準ぜられた。老齢にも筆力衰へず、年八十を超えて神護寺の壁畫を書いたといふ。性多芸にして、和歌、音律、香茶などの諸技に通じ、また作畫の外に夙に狩野流画を刻本として畫界に裨益するところが多かつた。寶暦十三年六月十九日没、年八十四。著、畫功潛覧、畫史会要、明朝紫硯、畫本手鑑、丹青錦囊など。（『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』第一巻　平凡社、一九三七年初版発行、一九九〇年復刻版第五刷参考、五二四頁）

法橋とは僧綱位三級（法橋・法眼・法印）の第三位で春トは三七歳頃（一七一五年）叙され、その後法眼には五六歳（一七三五年）に叙されている。[13]

「一井鳳梧賛　法橋春ト画　菊慈童」の制作年は享保庚戌（享保一五年・西暦一七三〇年）六月とあり、一井鳳梧が一一五歳、春トが五〇歳の作となる。鳳梧の没年は一七三一年であるから、亡くなる一年前に描かれた掛け軸ということになる。春トにおいては享保五年（一七二〇）頃に四一歳で本興寺方丈障壁画を制作した一〇年後の作となる。[14]

掛け軸上部に書かれた賛は、

聞説慈童飡菊水
納新吐故至神仙
定知日入蓬莱島
酔賞幾回七百年

と書かれている。

賛にある「蓬莱島」とは①中国の神仙思想に説かれる三神山の一。山東半島の東方海上にあり、不老不死の薬を持つ仙人が住む山と考えられていた。蓬莱山。蓬莱島。よもぎがしま。[15]である。辞典を参考に筆者が書き下しと現代語訳にした。

書き下し文

聞くならく慈童菊水を飡み
新しきを納れ　故きを吐きて　神仙に至る
定めて知る　日の蓬莱島に入るを
酔ひて賞づること　幾回か　七百年

現代語訳

聞くところによると　慈童は菊水を飲んで
新しい気を入れて　古い気を吐き出して　神仙となった
はっきりとわかる　日が蓬莱島に入るのを
酔って賞玩することが幾回か　七百年

東洋の逸話や伝説、歴史上の事件などおよそ三〇〇〇項目の画題解説事典である『東洋画題綜覧』[16]にも菊慈童の項目には「支那の仙人、彭祖のことで、菊によって長壽を保ち永く童形であったといふ。（以下略）」とある。

鳳梧一一五歳、長寿のお祝いに自身は賛を書き、絵を大坂を中心に活躍する町絵師の春卜に依頼したのかもしれない。

落款印章について、「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸には、

「法橋春卜筆　印（春卜）朱文　印（歩月）白文」と押されているように見える（図3）。

先行研究において、木村重圭氏は春卜の落款について

「法橋春卜図　印（法橋春卜）文白　印（秀月）朱文」

「法橋春卜図　印（春卜）朱文　印（止是勿）朱文」

「摂陽住　法橋高平春卜筆　印（愛董）朱文」

「法眼春卜図　印（弐翁之印）朱文」

「法眼春卜斎丁酉筆　印（乙卯法眼）朱文　印（滕印愛董）白文」

図3　掛け軸春卜落款部分

「法眼春卜一翁筆　印（乙卯法眼）朱文　印（滕印愛董）白文」
「法眼春卜雪静筆　印（雪静之印）白文　印（愛董）朱文」
「雀吃法眼春卜一翁筆　印（法眼一翁）白文　印（愛董之印）朱文」
「法眼春卜行年七十二翁筆　印（雪静斎）　印（滕印愛董）」
「式部卿法眼春卜行年七十四翁筆　印（？）　印（？）」
「式部卿法眼春卜一翁筆　印（？）　印（？）」
「雀吃法眼春卜行年八十一年叟筆　印（法眼一翁）白文　印（愛董之印）朱文」

これらは、春卜作品中の、ほんの一例であるが、これらによって、

一、秀月
二、止是勿
三、一翁
四、春卜斎
五、雪静、雪静斎
六、式部卿

等が知られると紹介している。読み方に確信はないとしながら、春卜法橋時代の比較的若い頃の二つの作品（「萬里小路尚房筆和歌色紙　春卜画寂蓮法師図」・「桑原長義筆和歌色紙　春卜画西行法師図」・「外山光顕筆和歌色紙　春卜画定家朝臣図」）にそれぞれ別の「秀月」印があると書いている。[17] 筆者は「秀月」の落款印章を現物・図録共に見たことがないので「歩月」印章を春卜が使用していたか否かについては今後の春卜作の発見を待ち、今回は

「歩月」印章の記録のみとしたい。

表装は大和表装（三段表装）で天地の裂地（きれじ）には題材と合わせ菊の織物があしらわれていた。制作当時の物か、再表装であるかは不明である。掛け軸裏八双（表木）付近に所有者が記したと思われる「狩野春卜菊童子之画一井鳳梧先生讃」と控えがあった。狩野春卜とあるのは狩野（派の絵師）春卜という意味だろう。

「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸の制作年である享保一五年周辺の春卜の活動は、これ以外に、享保五年（一七二〇）本興寺方丈障壁画制作と同じ時期に絵手本（絵のかき方を習うのに用いる手本）[18]『畫本手鑑』[19]を刊行し、享保一四年（一七二九）に俳人・上島鬼貫（うえじまおにつら）（一六六一―一七三八）[20]と紙本着彩の「四季草木図」（34・0cm×1098・5cm）巻子を制作している。以外の春卜法橋期の作品は梅に牧牛図（大阪天満宮蔵）と四季風俗図（大阪市立美術館蔵）が現存するものの詳しい制作時期については不明である。

「四季草木図」は『鬼貫と春卜』展（平成八年四月五日～五月一二日）図録によると、大坂の俳人貫鱗が春卜に画を依頼し、それに鬼貫の賛を求めたものであるらしい。春卜が四五図の四季の草木を描き、鬼貫が七句を含む文を添える。鬼貫の識語にある享保一四年（一七二九）は春卜五〇歳、鬼貫六九歳で大坂在住であった。春卜はのちに『似錦集』[21]や『詠物史画』[22]、『明朝紫硯』[23]といった草木図を刊行するが、本点は、それらにはるかに先行するものである。伊丹市指定文化財[24]。

以外にも春卜の生涯での合作は多く現存し、法橋期には「萬里小路尚房筆和歌色紙　春卜画寂蓮法師図」・「桑原長義筆和歌色紙　春卜画西行法師図」・「外山光顕筆和歌色紙　春卜画定家朝臣図」があり、先に述べた「秀月」印があると木村重圭氏は先行研究で書いている[25]。

三、本興寺障壁画群仙図菊慈童

本興寺は応永二七年（一四二〇）に大物で建立され、尼崎城築城のために元和三年（一六一七）、現在地の尼崎へ移築された。方丈はこの移設の際に新築された建造物と考えられていたが、天文一七年（一五四八）九月一三日の棟札・元和三年（一六一七）一二月吉日の棟札が発見され、大物建立期から方丈が存在しており尼崎移転にあたり再建されたことが判明した。慶安・元禄・文政期に改修が行われている。[26] 今日の方丈は、奥の上座から上段之間・松之間・鶴之間・孔雀之間・御講之間が二間の整形（同じ大きさの部屋を詰めて長方形に並べた様式）の六間取りの構成で各間の障壁画は

上段之間（上間奥室）

山水図（紙本墨画）　床貼付三面（床貼付側面に「法眼紹興行年■三歳筆　印」）　壁貼付四面　襖一〇面

松之間（上間前室）

花木図（紙本金地着色）　床貼付三面　違棚貼付三面　襖八面　腰障子六面　天袋四面

鶴之間（室中前室）

群仙図（紙本金地着色）　襖一〇面

群鶴図（紙本金地着色）　襖四面（「摂陽住　法橋高平春卜筆　印（愛文朱）」）

孔雀之間（下間前室）

鳳凰図（紙本金箋着色）　襖一〇面　腰障子一二面

御講之間（室中奥室・下間奥室）

群老祝寿星之図（紙本墨画淡彩）　襖八面（「群老祝寿星之圖鵬運齋高典常描　印（高典氏常）白文　印（鵬運人主　朱文）」）

広縁西端

牡丹獅子・秋草図（板・着色）　杉戸表裏四面

以上が本興寺方丈障壁画の全容である。[27]

鶴之間には「群仙図」と「群鶴図」が襖に描かれており「群仙図」二面中、西側には南から順に①劉女②蔡女仙③菊慈童④董奉。北側に⑤孫登⑥呂恭⑦黄仁覧が描かれ、[28]「群鶴図」には鶴七羽に菊やススキなどの秋草が描かれている（図4）。

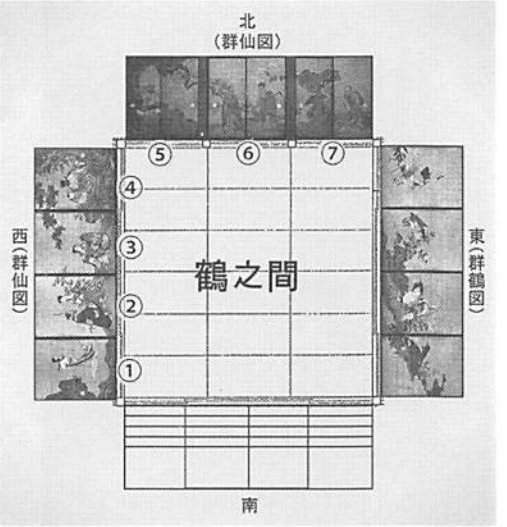

図4　鶴之間俯瞰図

本興寺の群仙図に描かれた菊慈童は方丈鶴之間西側の四枚立中央右側の襖に描かれている（図5）。向かいの「群鶴図」に菊が描かれているが、菊慈童にも「群仙図」全体においても菊の意匠はない。襖絵には老人と青年が並んで座り、同じ方向を見ている。手前の老人は右手に払子（ほっす）のような物を持ち、口周りに豊かな髭を蓄えている。仙伝には穆王や文帝の臣下が登場するが、格好から彭祖だろうか。奥の青年は右膝に角枕を乗せ、両手を添えている。こちらが菊慈童と考えられる。

図5　本興寺障壁画群仙図菊慈童

本興寺方丈障壁画について木村重圭氏は、「法橋時代の代表作は、尼崎本興寺の襖絵群であるが、これらは、作風的に江戸中期の狩野派の典型を示すものである。人物・樹木・岩・鳳凰・鶴と、いづれもやや硬直化した描写といえよう。色彩的にも濃彩の「群仙図」などはいささかアクの強さを印象づけている。四〇歳前後の制作と推測されているが、この頃の春卜には、まだ、狩野派を十分消化しきれていない面が多い。師は不明ではあるが、これらの作品を見れば、明らかに狩野派を学んで、そこからまだ十分に抜け出し得ていない様子が伺える[29]」。と述べている。

また、田中敏雄氏も「本興寺（尼崎市）の障壁画」において、「方丈障壁画の全容を解説する中で、西側四面（各一八四・四×一三八・二センチ）と、北側六面（各一八三・八×八六・四センチ）は群仙図で劉女、蔡女仙、菊慈童、董奉、孫登、呂恭、黄仁覧などを描いている。この群仙図には落款・印章はないが、脇坂淳氏は群鶴図と同じ大岡春卜の筆とする。この室は群鶴図においては金地を多くみせ、秋草と鶴を瀟洒で愛らしい花鳥として表わし、一方、群仙図の人物像は少し堅く、重厚な様で表現している。大岡春卜の多才な一面が窺える[30]」。と同様の感想である。

「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸と本興寺障壁画群仙図の菊慈童を比較すると掛け軸の方が人物一

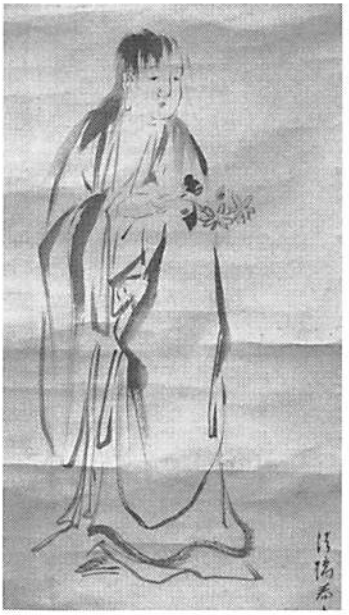

図6　「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸部分

人の簡素な画面ながら菊を手に持ち、菊慈童の画題らしさが感じられる。本興寺方丈の菊慈童に菊の意匠はないが、「一、菊慈童とは」にて紹介した『太平記』の「龍馬進奏事」にあるように法華経と菊慈童の関連を思い、春卜が童子に菊ではなく枕を持たせ、法華宗の大本山である本興寺を荘厳する為に描いたのなら深みのある障壁画である。

また、先行研究で春卜の描く人物の特徴に挙げられている撫肩の姿態やおちょぼ口・小さな眼など顔立ちも似ていることから[31]、今回発見した菊慈童を題材とした掛け軸は春卜の画ではないかと考える。

四、まとめ

今回見つかった「一井鳳梧賛　法橋春卜画　菊慈童」掛け軸は享保庚戌（享保一五年・一七三〇）の制作で、本興寺障壁画群仙図の菊慈童（享保五年・一七二〇）から一〇年後と考えられる。出雲松江出身の一井鳳梧と三田高平出身の春卜は大坂で会い、鳳梧一一五歳の長寿を祝って菊慈童の題材で制作されたのであろうか。春卜が画を担当したのは親交があったか町絵師として名を知っていたか不明である。本興寺障壁画群仙図菊慈童が実績

として考慮されていたなら面白いところである。春卜の法橋初期には二つの「秀月」（朱文）印章の画が存在するようであるが、今回発見された掛け軸の春卜印章は「歩月」（白文）で先行研究にないものであった。まだ人知れず収蔵されている春卜作品の発見が楽しみである。

註

（1）大本山本興寺『大本山本興寺寺宝目録』大本山本興寺、一九九一年
（2）脇坂淳「図版解説」大阪市立美術館編『近世大坂画壇』同朋舎出版、一九八三年、二三三頁
（3）平凡社編『大辞典』第七巻、平凡社、初版一九三六年、復刻版一九九四年、三九八頁
（4）平凡社編『大辞典』第二三巻、平凡社、初版一九三六年、復刻版一九九四年、四一四頁
（5）劉向編『神仙伝』。劉向・葛洪著、沢田瑞穂訳『列仙伝・神仙伝』平凡社、一九九三年
（6）原田実『日本王権と穆王伝承―西域神仙譚の日本的受容』批評社、一九九〇年
（7）三谷茉沙夫『不老不死伝説』青弓社、一九九五年、八三～八五頁
（8）作者・成立時期詳細不詳（室町時代）。全四〇巻
（9）山崎正和訳『日本古典文庫15　太平記　下』河出書房新社、一九八八年
（10）源豊宗「鬼貫賛春卜画『四季草木画巻』について」『地域研究いたみ』第一〇号、一九八〇年三月、二二頁。
（11）菜種油や桐の実をしぼった桐油を燃やして取った煤に膠を混ぜて作るもの。墨の粒子が細かく、この淡墨色はやや茶色味を帯びている。和墨は「油煙墨」と「松煙墨」の二種類がある。松煙墨は松の木を燃やして取った煤に膠を混ぜて作るもの。この淡墨は墨の粒子に大小がありやや青味を帯びている。（伊藤昌・久山一枝・塩澤玉聖・沈和

年・根岸嘉一郎・藤崎千雲・松井陽水監修『水墨画用語ハンドブック』日貿出版社、二〇二一年、三七頁）

(12) 一七二〇（享保五）年に出版した『絵本手鑑』自序には「法橋藤原愛董」と書いている。

(13) 中谷伸生「大岡春卜と大坂画壇の成立」『関西大学東西学術研究所　研究報告書　日本美術工芸研究班』二〇〇七年、四頁

(14) 同右

(15) 松村明監修『大辞泉』小学館、一九九五年、二四二三頁

(16) 金井紫雲編『復刻版　東洋画題綜覧』国書刊行会、一九九七年〔原本昭和一六年～一八年〕

(17) 木村重圭「大岡春卜について」図録『鬼貫と春卜』財団法人柿衞文庫・伊丹市美術館、一九九六年、四九頁

(18) 松村明監修『大辞泉』小学館、一九九五年、二九四頁。

(19) 一七二〇年。新日本古典籍総合データベース（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100275151/viewer/4）〔最終確認二〇二二年十月三十一日〕

(20) 江戸中期の俳人。摂津国伊丹の人。名は宗邇（むねちか）。通称、与惣兵衛。別号、仏兄（さとえ）・槿花翁（きんかおう）など。伊丹派の中堅として活躍。俳論「独（ひとり）ごと」、句文集「仏兄七久留万（さとえななぐるま）」など（松村明監修『大辞泉』小学館、一九九五年、二一四頁）

(21) 田々斎荷風編『似錦集』一七三五年の序。大坂の荷風が遠近の俳友に請い集めた草花の百句に、春卜が俳意を画して刊行した絵俳書。春卜も「丁酉（ていゆう）」の名で入集。ジャパンサーチ（https://jpsearch.go.jp/en/item/arc_books-Ebi1174）〔最終確認二〇二二年十月三十一日〕

(22) 一七四四年。ARC古典籍ポータルデータベース(https://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?f1==BM-JH087&enter=portal)〔最終確認二〇二二年十月三十一日〕

(23) 一七四六年。国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286870?tocOpened=1）〔最終確認二〇二二年十月三十一日〕

(24) 財団法人柿衛文庫・伊丹市美術館編「図版解説」図録『鬼貫と春卜』財団法人柿衛文庫・伊丹市美術館、一九九六年、六一頁
(25) 木村重圭「大岡春卜について」図録『鬼貫と春卜』財団法人柿衛文庫・伊丹市美術館、一九九六年、四九頁
(26) 大本山本興寺『本興寺の歴史と名宝』大本山本興寺、二〇一三年、八四～八七頁本興寺略年表
(27) 脇坂淳「狩野派系画家」大阪市立美術館編『近世大坂画壇』同朋舎出版、一九八三年、一八六～一八七頁
(28) 脇坂淳「図版解説」大阪市立美術館編『近世大坂画壇』同朋舎出版、一九八三年、二三三頁
(29) 木村重圭「大岡春卜について」図録『鬼貫と春卜』財団法人柿衛文庫・伊丹市美術館、一九九六年、五四頁
(30) 田中敏雄「本興寺（尼崎市）の障壁画」『近世日本絵画の研究』作品社、二〇一三年、四五二～四五三頁
(31) 脇坂淳「狩野派系画家」大阪市立美術館編『近世大坂画壇』同朋舎出版、一九八三年、一八八頁

参考文献

三谷茉沙夫『不老不死伝説』青弓社、一九九五年、七五頁～徐福渡来伝説・八三頁～彭祖伝
野崎貢『掛軸画法十二ヶ月』北辰堂、一九八二年
前野直彬『漢文入門』筑摩書房、二〇一五年
加藤徹『白文攻略　漢文法ひとり学び』白水社、二〇一三年
古田島洋介・湯城吉信『漢文訓読入門』明治書院、二〇一一年
石川忠久『漢詩鑑賞辞典』講談社、二〇〇九年